

# International Conference on Chemical Thermodynamics and Calorimetry に参加して

(近畿大) 木村 隆良

表記会議が IUPAC と中国化学会共催で 1989 年 8 月 24 日から 8 月 28 日まで中華人民共和国、北京市、清華大学 (Tsinghua Univ.) で開催された。本会議は IUPAC 熱力学委員会の決議にしたがって IUPAC 委員の I. Wadsö (Lund 大学, Sweden) が現在の中国は多数の化学熱力学、溶液化学者を持つようになってはいるものの、文化革命以来の政治的、経済的理由で国際的交流が十分でなく特に若い世代の育成を助長するため菅宏教授 (大阪大学) と共に多大の援助をされ、中国側の Riheng Hu, Haike Yan, Ruilin Liu, Yun Liu, Rongti Chen, Wenxing Yan, Songsheng Qu, Ming Dai 教授等の努力で開催の運びとなった。しかし会議直前の 1989 年 6 月の天安門事件の勃発でこの人道的事件に関して、世界的レベルでの政治的、経済的制裁が叫ばれ、それまで中国で開催を予定していた数多くの中国との二国間あるいは多国間の国際会議が中止、延期され、本会議自身も開催が危惧されていたとき、IUPAC 熱力学委員会は“我々科学者は政治に左右されるべきでない”との見解を示し、予定どおりの開催となった。しかし西側からの参加者は直前まで参加できるかどうか本人も分からなく、出張許可がなく個人の休暇で参加された方、出国出来なく発表のポスターを事務局に送って来られ参加の意を表された方等、中国の若い世代を育成するため世界的レベルでの熱化学者の協力がなされた。最終的には同伴者を除いて約 30 人の外国人と約 100 人の中国からの参加があり、一応の成功を納めた。この内日本からの参加者は次のとおりである。(敬称略) 安芸初美, 山本孫兵衛 (福岡大), 木村隆良, 高木定夫 (近畿大), 村上幸夫 (大阪市大), Stølen Svein (名大), 山村雅一 (東海大)。

北京空港に到着すると思いがけなく、第一回日中合同熱測定シンポジウムでお近づきになれた Zhang 博士が出迎えに来ておられ、恐縮すると共に今回の会議に対する中国化学者の期待の大きさを感しました。出迎えの車が郊外から市内に入るにつれて新聞等が報じられていた治安状況が気懸かりになって来たが、全く平穏なので少しびっくりした。清華大学は中国では北京大学よりも良い

大学 (理工系大学の頂点だそうである) で前身はアメリカ留学の予備校 (清華学堂) であったそうで、米国の援助で建設され、ゲストハウス等は机等の調度品まで米国から持参して出来た大学で洗練されている。構内には教員、技術員等の大学で働いている人と学生の為のアパートがあちこちに計画的に立ち並び東西に 2 km もあると云う中国で一番大きい大学で、緑も多く、古い中国風の煌やかな屋根と壁の建物 (清華学堂時代のもの) があちこちにあり、あたかも公園の中に大学が有るようでとても美しい。また清華大学の近くには北京大学、中国科学院、北京外国語学院があり北京市の最も大学生の多いアカデミックな地域で若い人たちの熱気で溢れる町であった。8 月 25 日の開会式では I. Wadsö 教授の IUPAC 代表としての挨拶に続き、C. Mengyuan 教授 (中国化学会代表)、N. Weidou 教授 (清華大学代表) の歓迎の挨拶が行なわれた。丁度天安門事件後の最初の大きな国際会議であったのか TV 局の取材があり、定時ニュースでなんども大きく取り上げ放映されていたのが印象的であった。開会式に続く特別招待講演は下記の通常の熱力学的手段のみならず熱分析をも含む広範な分野のテーマ 5 件の講演が行なわれた。

Recent Developments in Reaction and Solution Microcalorimetry, I. Wadsö (Lund, Sweden)

Recent Advances in linear Thermodynamic Function Relationships, Y. T. Chen (Tianjin, PRC)

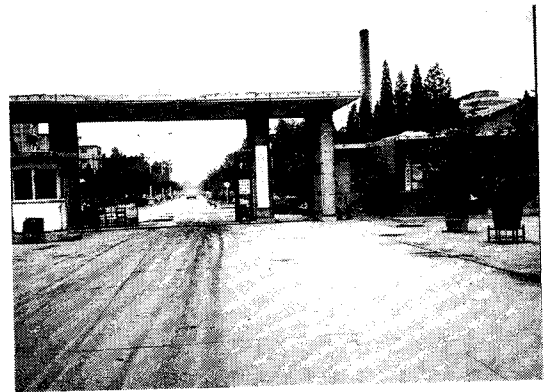
Thermodynamic Problem of Protein Structures and Scanning Microcalorimetry, P. L. Privalov (Pushchino, USSR)

Chemical Thermodynamics and Kinetics Applied to Pharmaceutical Compounds, E. E. Marti (Basel, Switzerland)

Interactions among PAH Compounds in a Model Coal liquid, D. J. Eatough (Provo, USA)

一般発表は 8 月 26 日と 8 月 27 日の二日間、溶液、生物、相平衡、化石燃料、熱測定とその応用の 5 の分科会に分けられ、2 会場で 80 件の招待講演と別会場で 75 件のポス

ター発表が行なわれた。しかしこの招待講演では外国人が当日まで参加するか否かが不明の場合もありポスター発表が急に口頭発表になるなどプログラムに少し混乱が見られた。これは会議事務局にも当日まで演者の参加が不明のものが有った為でいたしかたない。この講演で特に気がついたことは大部分の中国研究者の発表形式が投稿論文をそのまま読んでいる様であったことである。前回第一回日中合同熱測定シンポジウムで訪中した際にはそのようなことは全く感じなかった。会議全体を通じて中国の研究者が討論に参加することは多くなかった様ですが“Microcalorimetry in Cell Biology and Clinical Medicine”のテーマで山村雅一教授が講演された後、堰を切ったように質問が飛び出し、この分野の中国熱化学者の感心の高さの一面が伺われた。8月27日会議終了後、参加者全員でバスを連ねてErqi Theaterで、有名なThe Acrobatic Troupe of China Railway Cultural Troupeの27種に及ぶ雑技(アクロバット)の妙技に感心し、伝統芸術の深さに限りなき拍手を送った。8月28日は早朝から外国人参加者の為のエクスカッションにあてられ、世界7大奇跡の一で月から見える地上の2大建造物の一であると云われている万里の長城の見学に八達嶺(Badaling)まで出かけた。BC 7世紀ごろから建造が始まり全長6000 kmにおよぶと云う話には聞いていた長城に立って見廻すと、稜線の所々に見えるのろし台と、稜線を限りなく巨大な城壁が水平線まで続いており、前夜ある中国の教授が“中国で万里の長城を体験しないのは男でない”と豪語されたことを思出し、中国民族のシンボルとしての長城を訪れ、中国民族の偉大さに触れた思いがした。午後には明の十三陵(Shianling)を訪れ、夕刻のバンケットはQuanjide Beijing Duck Restaurantで行なわれ、席は中国研究者と外国研究者が偏在しないように配置され今会議の目的で有る交流が出来るように隅々まで配慮されて



写真(上)全体講演の会場、(下)清華大学南門

いた。各国代表は今回の会議の成功を祝い挨拶され、日本代表として高木定夫教授がお祝いの挨拶と共に1990年5月に菅宏教授を組織委員長として近畿大学で開催予定の第二回日中熱測定シンポジウムへの期待を話され、多くの中国熱化学者から、是非参加したいと伺い、再会が楽しみである。